

(4) 文学と芸術教育部会

教育部会名	文学と芸術
部会長名／作成者名	昆野 伸幸
概 要 (2 ページ)	
<p>(1) 組織・運営について</p> <p>・文学と芸術部会は、国際文化学研究科・人文学研究科・人間発達環境学研究科の3部局の教員によって以下のように構成されている。</p> <p>部会長 (1名) 幹事 (3名) 部会員 (合計24名)</p> <p>部会長 (任期2年) は国際教養教育院の全学会議に出席し全体の企画・調整にあたり、部会内へ全学共通授業科目の基本方針や学部からの要請など必要事項の周知を行う。幹事 (任期2年) は各部局から1名配置され、授業の企画・調整および成績の取りまとめに当たっている。開講に関して必要な事項は、部会長と幹事が協議して決定する。</p> <p>(2) 実施状況について</p> <p>・本部会は総合教養科目において「文学 A」「文学 B」「言語科学 A」「言語科学 B」「芸術と文化 A」「芸術と文化 B」を開講している。担当教員は、部会長と幹事が部会員の専門性を考慮して調整している。</p> <p>文学 A(一単位×4)</p> <p>世界にはさまざまな文学的伝統が存在する。それぞれの背後にある文化的背景やそれぞれの展開についての文学史的知識を学ぶとともに、すぐれた作品の味読を通して、文学作品を味わい楽しむ能力を高める。</p> <p>文学 B(一単位×12)</p> <p>長い歴史を持つ日本の文学について、その展開の多様性を理解し、各時代の背景や各ジャンルの特質を知るとともに、すぐれた作品の味読を通して、文学作品を味わい楽しむ能力を高める。</p> <p>言語科学 A および B(一単位×8)</p> <p>さまざまな言語の言語学的特質について学ぶとともに、言語と文化の関係の多様なあり方について多面的に考察し、言語という身近な存在がもっている文化的意味について理解を深める。</p> <p>芸術と文化 A(一単位×10)</p> <p>今日の芸術文化は、多岐・多様な様相をみせている。伝統の継承と発展、新たな創造と進化である。日本、西洋及び諸民族における芸術の展開と新しい文化形成について、音楽と造形の両分野から、理論的かつ実証的にアプローチを行う。</p> <p>芸術と文化 B(一単位×12)</p> <p>さまざまなジャンルの伝統芸術について、その成立・展開の歴史を学ぶとともに、現代的意義を理解する。また、すぐれた芸術に接しながら学問的方法に基づく鑑賞の仕方を学ぶことにより、ゆたかな鑑賞力を養う。</p>	

(3) 総合所見

2019 年度、「文学と芸術」部会は学外委員二名を招いて外部評価委員会を行ったので、そこで示された意見をまとめることで課題と所見に替えたい。(引続き 2022 年度においても以下の評価委員会の所見は有効であるが故、この場で記することにする。)

まず、クォーター制について強い関心が示された。ただ、日程やカリキュラムに対してかなり無理が生じていることも指摘され、総じて小規模であること、かつ学生のクオリティーが一定程度保証されていることによってようやく可能になっているのではないかという所見が示された。クォーター制の継続によって従来のカリキュラムが不可逆的に変化し、「特定のテーマを深く学ぶ」ことから「広く浅く学ぶ」方向に学修が転換してしまっただのは確実である。この転機をポジティブな結果に結びつける努力がより一層必要とされているだろう。

評価された点としては、振り返りアンケートの実施と、それに対して担当教員もコメントをつけられる点、またピアレビューが実施されている点で、授業改善のための複数の工夫が認められたと言える。

今後の課題として挙げられたのは、クォーター制による歪みの強制的ほかに、成績評価の是正及び同一科目におけるシラバスのばらつきであった。前者については四割ルール(秀と優が合わせて四割以下)もほぼ定着し、近年では大きく改善されている。ただし、後者についてはいまだ課題として残されている。人文学における授業では、授業の内容は個々の教員に委ねられており、実施の方法や指導内容などがそれぞれの専門と個性に基づいて行われることは問題ない。しかし、たとえばシラバスにおける「目標」については、今後もう少しすり合わせを検討していくべきだろう。

また、2022 年度は遠隔授業から対面授業中心へと戻ったものの、ここ 2 年間で培った遠隔授業のノウハウを効果的に利用するとともに、対面ならではの工夫もなされたと理解している。

A 組織構成と運営体制について

- ①基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか(100 字程度)

文系三部局に主配置あるいは配置されている教員で構成され、それぞれの教員の専門性に合致した科目を担当している。各部局から 1 名ずつの幹事が部会長と協議して担当教員の手配やカリキュラムの調整を行なっているが、このシステムは安定して運用されており、適切に機能している。

根拠資料

教育部会構成員名簿

B 内部質保証について

- ①学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行っているか(100 字程度)

学期末には教務情報システム上で「振り返りアンケート」が行われ、担当教員自身もその結果にコメントできるシステムになっている。

根拠資料

授業振り返りアンケート結果

- ②自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組が成果をあげている、又は計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか(150 字程度)

クォーター制によって生じたメリットとデメリットについて部会内で意見交換を行った。また同一科目におけるシラバスのばらつきについても、調整に向けて協議をする検討を進めている。

根拠資料

前年度までの自己点検・評価報告書、シラバス

③授業の内容及び方法の改善を図るためのFDを組織的に実施しているか（100字程度）

「文学と芸術」部会では2018年にピアレビューを実施し、さらにピアレビュー意見交換検討会を実施して授業の改善を図った。また、教養教育院主催のFDに積極的に参加するよう部会員に促している。

根拠資料

ピアレビュー（授業参観）実施に関するガイドライン、ピアレビュー実施科目一覧（教養教育委員会資料）

④教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるとともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか（100字程度）

希望教員にはティーチングアシスタント及びブスチューデントアシスタントが配置され、それぞれの職分に応じた業務に当たっているが、如何せん需要に供給が追いついていない傾向がある。両者とも、事前に担当教員によるオリエンテーションが行われるよう要請されている。

根拠資料

神戸大学 SA/TA 実施要領・ガイドライン、SA・TA 採用者名簿、TA ハンドブック

C 教育課程と学習成果について

①当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものとなっているか（100字程度）

文学、芸術、言語など人文学の諸課題を扱いながら伝統と近代、日本と世界を繋いで多文化理解を促すものであり、総合教養科目の第一区分「多文化理解」の目標に合致している。

根拠資料

シラバス

②授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか（100字程度）

共通目標、あるいは教養教育委員会での決定事項などは部会長から幹事を通じて各担当教員に伝えられている。

根拠資料

シラバス

③授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか（100字程度）

授業内容はシラバス通り、目標に沿って授業が組み立てられ、実践されている。

根拠資料

シラバス

④単位の実質化への配慮がなされているか（100字程度）

シラバスに成績評価基準が明記されるようになり、それをもとに評価が行われている。授業でのパフォーマンスや小テスト、レポート、試験などによって単位の実質化が進められている。

根拠資料

シラバス、小テスト、レポート課題

- ⑤教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか（150字程度）

「文学と芸術」部会は授業科目の性質上、講義科目が中心となる。しかしながら、教務情報システムを活用するなどして、大人数授業でもこまめにレスポンスさせる授業が可能となったため、双方向的な指導の試みが広がっている。

根拠資料
シラバス

- ⑥シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、事前・事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか（50字程度）

シラバスの必須項目指定が強化されたこともあり、基本的に全ての項目が記入されている。しかし「概要」についての抽象的な表現や、「授業中に指示」などの文言についてはまだ改善の余地がある。

根拠資料
シラバス

- ⑦学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか（100字程度）

シラバスをより細かく、誤解のないよう作成することによって履修指導を補っている。

根拠資料
シラバス

- ⑧学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか（100字程度）

各シラバスにオフィスアワーを明記し、学生が相談しやすい環境を作っている。また、教務情報システムのメッセージ機能を使った学修相談も増えている。

根拠資料
シラバス

- ⑨成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか（100字程度）

秀を1割未満、秀と優を合わせた評価をほぼ4割以内に収めるよう各教員に申し合わせ、数年をかけて秀についてはほぼ目標が達成された。優と秀の割合についても目標に近づいている。

根拠資料
シラバス、試験答案、成績分布（教養教育委員会資料）

- ⑩学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか（100字程度）

振り返りアンケートによれば、多くの学生が有益な授業に参加し、内容を理解できたと考えていることがわかるが、シラバスの掲げた目標を達成できたかどうかについてはやや自信がもてないでいる様子が窺える。

根拠資料
試験答案、レポート、授業振り返りアンケート結果